



TITLE:

「鬪殺遇恩情理輕重格」考

AUTHOR(S):

川村, 康

CITATION:

川村, 康. 「鬪殺遇恩情理輕重格」考. 東洋史研究 1995, 53(4): 684-703

ISSUE DATE:

1995-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154507>

RIGHT:

「鬪殺遇恩情理輕重格」考

川 村 康

はじめに

一 「鬪殺遇恩情理輕重格」の制定の背景

二 「鬪殺遇恩情理輕重格」の内容
おわりに

はじめに

唐鬪訟律五條に「諸を鬪毆して人を殺せば、絞。刃を以てし、及び故らに人を殺せば、斬。鬪に因ると雖も、兵刃を用て殺せば、故殺と同じ」とあるように、唐律は凡人間の鬪殺の刑を加害手段により斬（刃・兵刃）⁽¹⁾と絞（手足・他物）に分けるだけで、加害箇所や傷害の態様による區別は設けていなかった。ところが、宋慶元四年（一一九八）の斷獄格「鬪殺遇恩情理輕重格」（『條法事類』卷一六、文書門一、赦降）

理直・下手稍重（下手稍重とは、佗物を以て毆撃し、并びに手足もて重疊して頭・面・咽喉・胷乳・心腹・肋脇・陰隱の處を毆り、或は刃もて餘處を傷けるの類を謂う）。

理曲・下手輕。

右、輕と爲す。

理直・下手重〔下手重とは、刃を以て頭・面・咽喉・脅乳・心腹・肋脇・陰隱の處を傷け、及び斧鑕の類を以て、刃を用いざると雖も、上項の要害の處を毆撃し、并に手足・佗物を以て毆り、折支以上、及び項骨の折跌・腦骨の破損、若くは墮胎に至るの類を謂う〕。

理曲・下手稍重。

右、重と爲す。

は、理と下手の組み合わせにより鬪殺の情理を規定している。とくに下手の内容の規定はきわめて詳細である。唐律の簡便さに比した、この格の詳細さはどこから、いかにして生じたのであろうか。本稿はこの格の制定の背景の探究とその内容の検討を目的とする。

一 「鬪殺遇恩情理輕重格」の制定の背景

その名稱に「遇恩」という文言が挿入されていることから明かなように、鬪殺遇恩情理輕重格は一般的な規定ではなく、赦降の適用に際して使用されることが前提とされていた。では、赦降の適用に際して鬪殺の情理が問題になり、このような格が定められなければならないのはなぜであらうか。この問題を解決するためには、宋代の赦降の内容を検討する必要がある。⁽²⁾

宋代はしばしば赦降の發せられた時代であった。南郊・明堂の大禮に伴う三歳一赦が定例化し、皇帝の即位、服藥、不豫、封禪、太子の出生、立太子、天災、星變など、さまざまな名目で赦降が發せられた。表1は、沈家本氏が『宋史』本紀および『通考』卷一七三、刑考一二、赦宥から集計した宋代の赦降數である。⁽³⁾これによると、南北兩宋三二〇年間に大赦・肆赦・赦はあわせて一九五度、ほぼ一年半ごとに一度は發せられたことになる。このほかにも德音や減降、曲赦などがあり、また疏決も⁽⁴⁾ほぼ毎年一度行われることが定例化していたのである。それならば犯罪者はほとんど刑を免除されて

表1 宋代の皇帝別赦降數

皇帝	在位 年數	大赦	肆赦	赦	德音	降釋	減釋	錄囚	曲赦	別赦	その他
太祖	17年	9							6	1	赦雜犯 1
太宗	20年	11				11			11	1	
真宗	26年	16		1		12			19	1	贖釋 1
仁宗	42年	20		2	24			12	25	1	
英宗	4年	3			3			7			
神宗	19年	11			8			17	13	4	
哲宗	15年	2		7	10			1	2		
徽宗	25年	3		23	22				18	1	
欽宗	2年	1		1					1		
高宗	36年	21	1		1	3					
孝宗	27年	14		1			2		7		
光宗	5年	1	1	1					3		
寧宗	30年	13		5			6				
理宗	40年	21							3		
度宗	10年	3	1								
恭宗	2年			1					1		
宗宗	2年			1							

しまったのかというと、決してそうではない。宋代の赦降は対象を繫囚に限定するものが多く、その効果も刑の全免ではなく減降にとどめるものが中心であった。また、そもそも十惡、殺人など一定の凶惡犯罪は赦降の適用から除外されるのが原則であった。⁽⁵⁾では、そのなかで鬪殺はどのように扱われていたのであろうか。

建隆二年（九六二）六月九日の疏決『宋會要』一六九冊、刑法五、省獄）

旱を以て詔すらく。東京管内の見到禁ぜらる罪人は、惡逆、不孝、劫賊、故殺、放火、官典の枉法贓を受けるは放たざるを除くの外、其餘の雜犯死罪は、同情共犯の頭首は處死とするを除き、餘は並びに一等を減じ、靈武に配せ。流罪以下は三等を減じ、杖罪已下は並びに放て。有る所の釋放に該たらざる罪人は、開封府尹をして速かに疎決を與えしめよ、……と。

雍熙二年（九八五）九月丙午（五日）の赦『宋史』卷五、太宗紀二）

歳に兵凶なきを以て、十惡、官吏の贓を犯し、謀・故・劫殺を除くの外、死罪は減降し、流以下は之を釋

す。

咸平二年(九九九)閏三月丁亥(四日。亥、もと誤って丑に作る)の以旱減降兩京諸路繫囚制『詔令集』卷二五一、政事四、儆災(一)兩京・諸路の繫囚は、十惡の罪死に至り、官典の枉法贓を犯し、劫殺・謀殺・故殺して已に人を殺すは降さざるを除くの外、死罪は降して流に従い、流罪は降して徒に従い、徒罪は杖に従い、(杖)已下は並びに之を釋せ。

など、北宋初期の赦降には、劫殺・謀殺・故殺の適用除外を規定しながら鬪殺をこれに加えず、減降の対象としているものが多い。これは、劫・謀・故殺と違って、鬪殺には殺害の意思がないからである。⁽⁷⁾その一方で、淳化三年(九九二)七月二五日の疏決『宋會要』一六九冊、刑法五、親決獄

崇政殿に御し、在京の諸司の繫囚を録す。流罪以下は悉く原有に従う。尋で赦すらく。諸路の見到禁ぜらる囚は、四殺、官典の正枉法贓を犯すを除くの外、餘の死罪は降して流に従い、流已下は遞々一等を減じ、杖已下は之を釋せ、と。

至道元年(九九五)四月一九日の疏決(同、省獄)

詔して曰く。……宜しく常參官をして傳に乗り諸路に分往し、長吏と共に刑獄を決遣せしむべし。應を惡逆、四殺、官典の贓を犯し、官物を欠負して催理を行わるは赦せざるの外、其れ劫盜は止だ首惡を誅し、餘黨(餘、もと誤って余に作る)は悉く杖脊・刺面して本處の牢城(に配せ)。其の餘の罪は、流以下は遞々一等を降し、杖已下は放て。至る所にて決遣し訖れば、刑名の事狀を具して疾置に附して以て聞せ、と。

咸平三年(一〇〇〇)一〇月二三日の西川峽路の疏決(同前)

翰林學士王欽若・知制誥梁灝をして西川峽路安撫使たらしむ。仍お詔すらく。至る所にて繫囚を録問し、十惡の死に至り、官典の正枉法贓を犯して人を殺すに至り、劫殺・謀殺・故殺・鬪殺して並びに已に人を殺すを爲すは降さざるを除くの外、餘の死罪は流に従い(從、もと誤って徒に作る)、流已下は遞々等を降し、杖已下は之を釋せ。死罪の合に

減降に該つべきも、情理恕し難き者は、疾置して以て聞せ、と。

など、四殺すなわち劫殺・謀殺・故殺・鬪殺のすべてを適用除外とする赦降も降されている。⁽⁸⁾眞宗朝前期までの赦降は、鬪殺を完全に適用の対象とするか、または完全に適用除外とするかのどちらかであったわけであるが、やがて、景德四年(一〇〇七)一〇月甲寅(二日)の曲赦〔宋史〕卷七、眞宗紀二)

詔すらく。宜・柳・象州、懷遠軍の死罪以下は、十惡、謀・故・鬪殺、官吏の枉法贓を犯す者に非ざれば、並びに之を原せ。廣南東西路の雜犯死罪以下は遞々一等を減ぜよ、……と。

天禧二年(一〇一八)八月甲辰(二五日)の立皇太子大赦〔長編〕卷九二、眞宗)

天下に大赦す。惟だ十惡、劫殺・謀殺・故殺・鬪殺、官物を盗み、符印を偽造し、官典の贓を犯すは、論ずること律の如し。

などの、後者に屬するものが多數を占めてゆく。⁽⁹⁾

ところが、大中祥符八年(一〇一五)正月壬午(二日)の申告上聖號赦文〔詔令集〕卷一三六、典禮二、天神下)

天下に大赦すべし。繫囚の已に人を殺し、十惡の罪死に至り、官典の正枉法贓を犯すは赦せざるの外、鬪殺の情憫むべき者は奏裁せよ。自餘は威な之を赦除せよ。

天禧三年(一〇二九)十一月辛未(一九日)の南郊赦〔長編〕卷九四、眞宗)

天下に大赦す。劫殺・鬪殺して已に人を殺し、十惡の死に至り、符印を偽造し、放火、官物を盗み、官典の入己贓するに非ざれば、威な之を除す。鬪殺の閔むべき者は奏裁す。

至和三年(一〇五六)八月二日の太平興國寺奉安祖宗神御禮畢詔〔宋會要〕一六九冊、刑法五、省獄)

在京并びに輔郡の見到禁ぜらる罪人は、十惡・四殺を犯し、官典の正枉法贓・監主自盜し、符印を偽造し、放火は赦せざるを除くの外、其餘の雜犯死罪は降して流に従い、流罪は降して徒に従い、徒罪已下は並びに放て。鬪殺の情

理憫むべき者の如きは奏裁せよ。赦の到る日を限り、長吏已下に仰せて當面に決遣せしめ、訖れば事狀を具して以て聞せよ。

など、眞宗朝後期以降には、殺人全般あるいは鬪殺までの適用除外を明言したあとに、鬪殺の情理可憫案件の奏裁を規定する赦降が下されるようになり、しだいに一般化してゆく。これらの赦降により鬪殺の一部の奏裁が許容され、結果的に死一等を減ぜられる可能性が開かれた。そのための條件が「情理憫むべき」ことであつたのである。これは一般的死刑奏裁の條件として情理可憫が確立されてゆく時期と符合している。⁽¹⁰⁾この變化は、鬪殺といえども人を殺害したという結果の重大性から判断すれば減降は望ましくないが、さりとて殺害の意思を有しない鬪殺犯を完全に赦降の恩澤から除外することもまた仁慈に反するという價值判断から妥協的に生じたものであろう。ただ、この段階ではあくまで皇帝の意思に最終的判断が委ねられるということにすぎず、情理可憫であれば必ず減等が與えられるというわけではなかつた。慶曆五年（一〇四五）三月甲申（二八日）の陝西解嚴曲赦（『詔令集』卷二八、政事七一、武功上）

陝西の諸州府軍監縣等、敕命の到る日を限り、見に禁ぜらる罪人は、十惡、并びに故殺・謀殺・劫殺、放火、持杖行劫、官物を侵盜し、符印を偽造し、毒藥を合造し、官典の正枉法贓を犯すは、法に依り施行するを除くの外、應そ雜犯死罪、并びに鬪殺死罪、并びに鬪殺の情理憫むべき者は、並びに流に従うを許す。内、存留して彼に在らしむべからざる者あれば、即ち刺して五百里軍州の牢城に配して收管せよ。其れ流罪は降して徒に従い、徒は降して杖に従い、杖罪以下は並びに放て。

は、鬪殺全般と鬪殺情理可憫の流への減等を規定し、鬪殺全般を劫・謀・故殺とは異なる扱いとしている。しかしなお鬪殺は雜犯死罪とも別範疇とされており、本來的には赦降の適用が除外されるべきものとされていることは明かである。したがって、これは曲赦という、地域限定的な赦降に規定された特例的な措置である。景祐二年（一〇三五）七月二五日の疏決（『宋會要』一六九冊、刑法五、親決獄）

刑部に詔すらく。應そ三京畿縣の見到禁ぜらる罪人は、劫・謀・故・鬪して並びに已に人を殺すを爲す者、並びに十惡、官典の正枉法賊・監主自盜し、符印を偽造し、放火は法に依るを除くの外、雜犯死罪は並びに降して徒に従う。情理重き、及び鬪殺の情閲むべき者は、減降に依り、決して五百里外の牢城に配せ。其餘の流罪は徒に降し、杖已下は並びに放て、と。

では、鬪殺情理可憫は雜犯死罪情重とともに、徒刑に減輕したうで配五百里外牢城が附加されたが、治平元年（一〇六四）三月一日の疏決（同、省獄）

帝、親から繫囚を録す。十惡、四殺、官典の正枉法賊・監主自盜を犯し、符印を偽造し、放火は論ずること法の如し。餘の死罪は降して流に従う。内、情理重き、及び鬪殺の憫むべき者は、降に依り刺して五百里外の牢城に配す。強盜の死に當たるも、また降に依り刺して廣南の牢城に配す。情理重き者は廣南遠惡州軍に配す。流は降して徒に従い、徒は降して杖に従い、杖已下は並びに放つ。

治平二年（一〇六五）二月一七日の疏決（同前）

帝、親から繫囚を録す。十惡、四殺、官典の賊・監主自盜を犯し、符印を偽造し、放火を除くの外、鬪殺の憫むべき、及び劫盜の死に至るは、決し訖りて刺して牢城に配す。餘犯の死罪より徒までは各々一等を降し、杖已下は之を釋す。

治平三年（一〇六六）三月一四日の疏決（同前）

帝、親から在京の繫囚を録す。十惡、四殺、官典の賊・監主自盜を犯し、符印を偽造し、放火は降さざるを除き、餘罪の死は降して流に従い、流已下は遞々之を降す。降して流に在りて情重き、及び鬪殺の憫むべき者は、降に依り決して五百里外の牢城に配す。強劫盜の罪死たる者は沙門島、流たる者は廣南の牢城（に配す）。杖已下は放つ。

治平四年（一〇六七）四月一九日の疏決（同前）

上、親から在京の繫囚を録す。十惡、四殺、官典の贓・監主自盜を犯し、符印を偽造し、放火は法に依り施行するを除くの外、應そ雜犯死罪は並びに降して流に従う。内、情理（重き）、並びに鬪殺の情理憫むべき者は、減降に依り、決し訖りて各々五百里外の牢城に配す。強劫の死に該たる賊人も、また減降に依り、決し訖りて沙門島に配す。罪流に至るは、減降に依り、刺して廣南の牢城に配す。其餘の流罪は降して徒に従い、徒罪は降して杖に従い、杖罪已下は並びに之を釋す。

などの疏決では、鬪殺情理可憫は流に減等し、刺刑の附加については異同があるが、いづれも配五百里外牢城が附加されている。英宗朝までには、疏決において鬪殺情理可憫案件をこのように扱うことがほぼ定例化していたのである。その他の赦降の際の鬪殺情理可憫案件の奏裁においても、同様の措置がなされていたことは想像に難くない。

だが、神宗朝に入り、熙寧九年（一〇七〇）六月一五日の疏決（同、親決獄）

上、崇政殿に御して在京諸司の繫囚を録す。謀殺・鬪殺を犯す者の並びに已に人を殺すを爲す者、並びに十惡、強盜、符印を偽造し、放火、官員の入已贓（入、もと誤って人に作る）を犯し、將校・軍人・公人の枉法贓を犯し、監主自盜贓するは、並びに法に依るを除き、其餘犯の死罪は降して流に従い、流は降して徒に従い、徒は降して杖に従い、杖已下は並びに放つ。内、鬪殺の情理輕き者は一等を減じ、並びに雜犯死罪の情理重き者は降す所に依り、決し訖りて並びに刺面して千里外の牢城に配す。斷じ訖りて案を録して聞奏す。強盜の罪死に至るも情理輕き者は一等を減じ、刺して本住處より三千里外の牢城に配す。

は、鬪殺の情理輕き者に一等減を與え、千里外牢城への刺面配を附加している。減等後の附加刑を加重するとともに、減等の條件を「情理可憫」から「情理輕」へと變更しているのである。⁽¹¹⁾この變化は、熙寧一〇年（一〇七七）三月辛未（二二日）の疏決『長編』卷二八一、神宗

繫囚を録す。雜犯死罪は降して流に従い、流以下は一等を第降し、杖以下は之を釋す。其れ雜犯死罪の情理重き、並

びに鬪殺の情理輕き者は、皆な降し、決し刺して千里外の牢城に配す。

元豐五年（一〇八二）二月癸酉（二二日）の曲赦梓州路州軍德音（『詔令集』卷二一九、政事七二、武功下）

梓州路の諸州軍に曲赦すべし。赦書の到る日の味爽以前を限り、殺・盜及び賊は法に赦せざるを除くの外、枉法・自盜の死罪の情理輕き者は奏して旨を取り、鬪殺の死罪の情理輕き者は一等を減じ、刺して千里外の牢城に配せ。其餘は威な之を赦除せよ。

などへと、附加刑の若干の變更を伴いつつも繼承されてゆく。元豐八年（一〇八五）正月甲寅（二九日）の元豐八年赦天下制（同書卷二六、政事六九、恩宥下）

天下に大赦すべし。劫・謀・故・鬪の四殺して已に人を殺し、十惡、印を偽り、放火、盜賊の死に抵たるは赦せず、及び情理輕きは奏裁し、等を減じ刺して配するを除くの外、其餘の罪は輕重となく、威な之を赦除せよ。

は、鬪殺を劫殺・謀殺・故殺や十惡・放火・強盜などとともに、原則として適用除外としながら、「情理輕」の場合には奏裁を経て減等刺配を與えることを明言している。この、赦降における鬪殺案件の奏裁減等條件の變更は、單なる呼稱の變更ではない。「情理可憫」が個別具體的にしか判斷し得ない主觀的な條件であるのに對し、「情理輕」「情理輕」は比較的客觀的な條件であり、どのような行爲類型がこれに該當するか、あらかじめある程度明確にされている必要があるからである。これは、刑部・大理寺など中央官廳における斷例の蓄積とその編纂頒行によって、赦降の適用時にいかなる鬪殺案件に奏裁減等を認めるのが適當かということが、ある程度明確にされてきたことの反映であらう。⁽¹²⁾

そして哲宗朝では、元祐元年（一〇八六）九月辛酉（六日）の明堂赦（『長編』卷三八七、哲宗）

宣德門に御して肆赦す。鬪殺の罪死に至るは、犯すこと約束の内に在ると雖も、情理稍や輕き者は一等を減じ、刺して千里外に配せ。輕き者は五百里。並びに牢城。斷じ訖れば案を錄して聞奏せよ。

が、鬪殺案件は、約束の期間内すなわち明堂の大禮を豫告する御札の發布後に犯されたものであつても、「情理稍輕」も⁽¹³⁾

しくは「情理輕」であれば一等を減じ、それぞれ千里外、五百里の牢城に刺配すると規定している。鬪殺案件の減等と刺配牢城の附加は奏裁を待つことなく行われることになり、減等の條件もさらに情理稍輕と情理輕の二段階となった。この變化は、元祐三年（一〇八八）二月の去冬連月降雪今春久陰德音（『詔令集』卷一五四、政事七、儆災四）

應そ四京・諸道州府軍監縣の、敕命の到る日以前に、見に禁ぜらる罪人は、常赦の原さざるを除くの外、枉法・自盜の罪死に至るも、情理輕き者は奏して指揮を取れ。鬪殺の罪死に至るも、情理稍や輕き者は一等を減じ、刺して千里外の牢城に配せ。輕き者は刺して五百里外の牢城に配せ。斷じ訖れば案を録して聞奏せよ。其餘の死罪は降して流に従い、流罪は降して徒に従い（徒、もと誤って徒に作る）、徒以下は並びに放て。強盜の罪死に至るは、降す所に依り、決し訖れば情理重きは刺して廣南遠惡處に配せ。輕き者は二千里外の牢城に配せ。

元祐六年（一〇九二）九月壬子（二七日）の上清儲祥宮成德音（同書卷一八〇、政事三三、營繕下）

應そ四京・諸道州府軍監縣の、德音の到る日已前に、見に禁ぜらる罪人は、死罪は法に依るを除き、内、枉法・自盜の罪死に至るも、情理輕き者は奏裁せよ。鬪殺の罪死に至るも、情理稍や輕き者は一等を減ぜよ。其餘の死罪は降して流に従い、流罪は降して徒に従い、徒已下は並びに放て。

などの全國的な赦降に踏襲されてゆくのである。

赦降における鬪殺の一部減等規定の實效化と、減等條件適用の判斷の州への委任には、その判斷基準のより一層の明確化が不可欠である。これには中央官廳での斷例の蓄積とその編纂頒行だけでは不充分である。この必要に應じて生み出されたのが「鬪殺情理輕重格」であった。『宋會要』一六四冊、刑法一、格令二、建中靖國元年（一一〇一）六月三日には、この格の全國的な頒布に至る經緯が記されている。

詔すらく、鬪殺情理輕重格を諸路に頒て、と。是より先、格、上られて刑部・大理寺に用いらる。而して州郡の議刑、往往にして臨時に出で、或は其の手を高下するを得。決すること能わざるに至れば、則ち疑慮を以て奏裁す。是

を以て留獄多し。大理卿周鼎以て請を爲す。故に是の詔あり。

この格はすでに刑部・大理寺で使用されていたが、州の鬪殺案件の處理に際しては恣意的な措置や、安易な疑慮奏裁のための審理の長期化という弊害が生じていた。このため、周鼎の請を承けて、全國へと頒行されたのである。

ところで、建中靖國元年頒行の鬪殺情理輕重格は、鬪殺の情理を重・稍輕・輕の三等に分類していたと考えられるが、⁽¹⁴⁾

『條法事類』所掲の鬪殺遇恩情理輕重格はこれを重・輕の二等としている。この違いはどこから生じたのであろうか。建炎二年（一一二八）六月一日の疏決（『宋會要』一六九冊、刑法五、親決獄）

行在揚州并びに屬縣、及び行在の大理寺・御史臺・殿前馬歩三司の見到禁ぜらる罪人を疎決す。劫殺・謀殺・故殺・鬪殺を犯し並びに已に人を殺すを爲す者、并びに十惡、符印を僞造し、放火、官員の入己贓を犯し、將校・軍人・公人の枉法贓を犯し、監主自盜贓するは並びに法に依るを除き、其餘の雜犯死罪は降して流に従い、流罪は降して徒に従い、徒罪は降して杖に従い、杖罪已下は並びに放つ。内、鬪殺の情理輕き者は一等を減じ、并びに雜犯死罪の情理重き者は降す所に依り、決し訖りて並びに刺して千里外の牢城に配す。斷じ訖りて案を錄して聞奏す。強盜の罪死に至るは降す所に依り、決し訖りて、情理重き者は刺して廣南遠惡處に配し、情理輕き者は刺して二千里外に配す。並びに牢城。

紹興二年（一一三二）五月二五日の疏決（同前）

上、後殿に御して臨安府并びに屬縣、行在の諸司の繫囚を疎決す。四殺・十惡を犯し、符印を僞造し、放火、官員の入己贓（入、もと誤って人に作る）を犯し、將校・軍人・公人の枉法贓を犯し、監主自盜贓するは並びに法に依るを除き、其餘の雜犯死罪は遞々一等を降し、杖罪已下は之を釋す。内、鬪殺の情理輕き者は一等を減じ、并びに雜犯死罪の情理重き者は降す所に依り、決し訖りて並びに刺して千里外の牢城に配す。斷じ訖りて案を錄して聞奏す（案、もと誤って按に作る）。強盜の罪死に至るは降す所に依り、決し訖りて、情理重き者は刺して廣南遠惡處に配し、情理

輕き者は刺して二千里外に配す。並びに牢城。

など、南宋初期の疏決は鬪殺の減等條件を「情理輕」⁽¹⁵⁾一等のみとしている。そしてこの變化は、孝宗朝に入り、乾道二年（一一六六）六月の疏決（同、省獄）

詔すらく。大理寺・臨安府並びに三衙、及び浙西の州縣の見到禁ぜらる罪人は、在內は刑部・御史臺の官に委ね、在外は、州は守臣に委ね、縣は通判に委ね、躬親ら獄に就いて引問せしめよ。如し大情已に正されれば、内、鬪殺の情理輕き、並びに雜犯の死罪より徒罪已上に至るまでは、各々一等を減じて斷遣し、杖罪已下は並びに放て、と。

にも踏襲されている。これ以外の赦降においても同様の變化が見られたことは疑いない。つまり、赦降における鬪殺の減等條件は、鬪殺情理輕重格頒行時の情理輕・情理稍輕の二等から、ふたたび情理輕一等へと變更されたのであり、この變化を反映して格の規定が改められた結果が鬪殺遇恩情理輕重格として遺されたのである。

二 「鬪殺遇恩情理輕重格」の内容

本稿冒頭に示したように、鬪殺遇恩情理輕重格は理直・下手稍重と理曲・下手輕を情理輕、理直・下手重と理曲・下手稍重を情理重と規定している。⁽¹⁶⁾ 理直・下手輕と理曲・下手重という組み合わせについては規定がないが、これは擧重明輕・擧輕明重の法理に準じて、前者が情理輕、後者が情理重に屬することは自明のこととして規定が略されたからである。⁽¹⁷⁾ これら情理・理・下手の關係をまとめると、表2のようになる。

表2 鬪殺遇恩情理輕重格における情理・理・下手の關係

	下手輕	下手稍重	下手重
理直	(情理輕)	情理輕	情理重
理曲	情理輕	情理重	(情理重)

表3 鬭殺遇恩情理輕重格における下手重・下手稍重の内容

加害手段	刃	斧 鑊 の 類	佗 物	手 足
下手重	頭・面・咽喉・胃乳・心腹・肋脇・陰隱の處を傷ける	刀刃を用いざると雖も、上項の要害の處を毆撃する	殴り、折支以上、及び項骨の折跌・腦骨の破損、若くは墮胎に至る	
下手稍重	餘處を傷ける		毆撃する	重疊して頭・面・咽喉・胃乳・心腹・肋脇・陰隱の處を毆る

下手は加害手段・加害箇所・傷害の態様によって、重・稍重・輕の三等に分類されている。下手重・下手稍重の内容は、「の類」という文言が附せられているとはいえ、表3のような、きわめて客観的かつ明確な規定がなされている。下手輕の内容は規定されていないが、これも舉重明輕の法理に準じたからであり、あえて推定すれば、加害手段は手足のみに限られ、加害箇所と傷害の態様は、要害の處すなわち頭・面・咽喉・胃乳・心腹・肋脇・陰隱の處では一度だけ毆った場合、それ以外の箇所では毆って骨折以上に至らなかつた場合ということになる。なお、加害手段が刃であれば傷つけることが當然であるので、毆撃は規定されていないのである。⁽¹⁸⁾

理は曲・直の二等とされているが、格はその具體的内容を規定しない。しかし、唐鬭訟律九條「諸を鬭して兩つながら相い毆傷すれば、各々輕重に隨い、兩つながら論すること律の如し。後に下手して理直たれば、二等を減ず〔死に至れば減ぜず〕」および同條疏議「後に下手して理直たれば、二等を減ずとは、假えは甲、乙を毆りて傷けざれば、合に笞四十たるべし。乙、甲を犯さず、無辜にして打たれ、遂に拒みて之を毆れば、乙、是れ理直たり。本毆の罪より二等を減じ、合に笞二十たるべし。乙、若し毆に因りて甲を殺せば、本罪は縦え死に至らざるも、即ち合に減ずべからず。故に注に云う、死に至れば減ぜず、と」によれば、理直とは、毆打されるべき理由がないのに毆打されたため、これに抵抗して對手を毆打した場合ということになる。つまり、對手からの自己への攻撃に對する反撃として對手を攻撃した場合が理直であ

り、理由はそれと反對に、自ら先に對手を攻撃した場合ということになる。唐律では理直であっても對手を殺害すれば減等は適用されないが、鬪殺遇恩情理輕重格では理直であれば下手重でない限り、理曲であっても下手輕であれば情理輕とされて赦降上の減等の対象とされたのである。

『通考』卷一七三、刑考一二、赦宥、政和五年（一一一五）の夏竦の言は、鬪殺死刑案件の情理可憫奏裁と赦降上の情理輕減等との抵觸を問題とする。

知興仁府夏竦言えらく。諸路の奏獄、祖父母（父母）の人の殴る所と爲るに因りて、子孫之を殴り、以て死に致す者あれば、並びに情理可憫に坐して奏裁し、流配を免ぜらるること多し。若し赦に遇えば、則ち復びは奏裁せず。即ち鬪殺情理と作し、等を減じて流配せらる。是れ赦に遇わざる者は幸たりて、赦に遇う者は不幸たり。請うらくは、今より赦に遇うと雖も、また奏裁せしめんことを、之に従う。

祖父母父母が毆撃され、これに反撃して對手を殴り死亡させた場合、通常は情理可憫として奏裁の対象となり、赦降が下されると情理輕として減等の対象となる。ところが奏裁の場合には多く配軍は附加されないが、赦降による減等の場合は赦降の規定に従い配軍が附加され、しかも赦降が適用されたのであるから改めて奏裁も行われない。その結果、赦降が適用されたほうが受刑者には不利益になってしまう。このように指摘した夏竦は、赦降が適用されたときにも、かような場合には奏裁を行わせることを提言し、裁可されている。ここには、祖父母父母への毆打に對する反撃行爲が情理可憫に當たり、なおかつ赦降上の情理輕にも該當することが示されている。この行爲が哲宗朝以前の赦降上の情理可憫に該當したことも、まず疑いはない。赦降における鬪殺の奏裁減等の條件が情理可憫から情理輕に變化したとき、情理可憫という主觀的な條件は理直というかたちで繼承され、これに下手という客觀的な條件が加えられたと考えられる。それまでは情理可憫と判斷されたであろう祖父母父母への毆撃に對する反撃行爲は、新たな條件のなかでは理直と評價されたに違いなし。唐鬪訟律三四條「諸そ祖父母父母、人の毆撃する所となりて、子孫即ちに之を毆撃し、折傷するに非ざれば、論ぜ

ず。折傷すれば、凡鬪折傷より三等を減ず。死に至れば、常律に依る」では、祖父母父母への毆撃への即時の反撃であっても、對手を殺害すれば減等は與えられない。しかし、宋代では理直として、下手重でない限り赦降上の減等の対象となつたのである。また、『條法事類』卷七三、刑獄門三、決遣の慶元斷獄申明である乾道七年（一一七一）六月二七日敕所引の晏浸の笏子も、夏鑄の言と同様の指摘と提案を行っている。

敕令所狀すらく。刑部の申せる、大理評事晏浸の笏子。比來州軍、情重法輕を以て具聞すること多けれども、未だ情輕法重と作して奏裁するを聞かず。謂うに、鬪殺の死に至るの如きは、内、人に先に田苗を侵損せらるるに因り（因、もと誤つて困に作る）、及び欠負を理索するに因り、并びに人に冒られて父母に及び、及び人に先に尊長を犯さるるに因り。如し此等の類、恩に該たらざれば、皆な敕斷を蒙り、貸命して脊に決して伍伯里或は參伯里より鄰州に至るまでに配せらるるも、次を以て編管に止むの例あり。若し赦降の「鬪殺の罪死に至り、情理輕き者は壹等を減じ、刺して阡里外の牢城に配す」と稱するに遇えば、官司は往往にして更に具奏せず、並びに赦降に依りて斷じて阡里に配し、遇恩をして不遇恩に比して反て重刑を得さしめるを致す。今後恩に遇える此の似きの色、及び應そ罪を犯し情輕法重の人あれば、並びに條に依りて奏裁せんことを、と。本所看詳すらく、刑部の申せる所の事理に依り、仍お各路の提刑司をして常切に遵守覺察施行せしめんと欲す、と。聖旨を奉ず、依れ、と。

ここで問題とされている行爲は、農地・農作物の侵害者や債務者に父母を罵られた場合、あるいは尊長を加害された場合の反撃による鬪殺である。これによれば、反撃の原因となる侵害者・債務者の行爲は、父母の場合には毆撃だけでなく罵詈雑言も含むことになり、また毆撃の場合その対象は祖父母父母だけでなく尊長にまで擴大されている。つまり、鬪殺遇恩情理輕重格の理直は、唐鬪訟律九條とその疏議の言う理直よりも廣い内容を託されていたことになる。⁽¹⁹⁾

ところで、『要錄』卷一〇六、紹興六年（一一三六）十一月丁卯（三日）の耿自求の言

左司郎中耿自求言えらく。人を殺す者は死すとは、古今不易の典なり。吏緣りて姦を爲し、時好に迎合し、賞典を希

覬し、情實を以てせずして例に可憫と奏し、苟に盡く原貸せらる。生者は即ち幸たるも、死者の冤抑は奈何にせん。願わくは監司州郡に、今後可憫の理を詳究することを詔せられんことを。謂うに、人を傷けるも應に死に致すべからざるに、偶々にして死に致す所以の者にして、方めて可憫と爲す。若し鬪争毀訾に因て、復た棒刃手足等を用て人を殺して死に致すことあれば、則ち相犯に各々輕重あり。尙お何の情の可憫たらんや。……庶幾くは官吏の希覬の望を絶ち、死者・生者をして均しく聖朝平允の澤に被らせしめんことを、と。刑部に詔すらく、看詳して省に申せ、と。は、情理可憫概念の不當な擴大を指摘し、單なる鬪争や罵詈に對する反撃による鬪殺さえもが情理可憫とされているとする。さらに、同書卷一七二、紹興二六年（一二五六）四月戊戌（二七日）の凌哲の言

右正言凌哲言えらく。……臣また契勘すらく、大辟の犯す所、未だ財氣鬪詈に因らずして死に致す者あらず。今有司は、但だ先に曾て人に一句を罵られ、人に一拳を打たれたるを以て、便ち以て可憫と爲して奏裁す。此の如ければ則ち故殺・鬪殺の條令、皆な廢すべし。惠姦長惡、此より大なるはなし。伏して望むらくは、聖慈もて詳酌施行せられんことを、と。之に従う。

も、一句の罵詈、一拳の毆打に對する反撃による鬪殺さえもが情理可憫として奏裁されていると指摘している。これらは情理可憫の範圍をめぐる問題であるが、赦降上の理直の内容をめぐるても、同様の問題が生じていたことは疑いが無い。それは常に概念の恣意的な擴大という危険を孕んでいた。なぜなら、理直も情理可憫と同様に、畢竟個別具體的かつ主觀的にしか判斷できない條件であったからである。

おわりに

鬪殺遇恩情理輕重格は、鬪殺の一部を減降の對象とする赦降の一般化を背景に、その對象の明確化を目的として制定された鬪殺情理輕重格を繼承したものである。したがってそれは、下手という客觀的な面についてはきわめて詳細かつ具體

的な規定を有したが、理という主観的な面については具体的な規定を置くことはできなかった。この点で、赦降における鬪殺案件の減等の條件は、死刑案件の奏裁の條件と共通の問題を有していたのである。しかし、宋代の赦降とこの格とに具現された、絶対的法定刑主義の赦降による修正という試みは、決して無意味であつたわけではない。その経験は、たとえば清代における防衛行爲の評價に活かされているであろう。これは本稿に對して、さらに通史的な視點からの再検討が必要とされる所以のひとつであるが、今後の課題としなければならない。

〔凡例〕 本稿では、『慶元條法事類』を『條法事類』、『文獻通考』を『通考』、『宋會要輯稿』を『宋會要』、『宋大詔令集』を『詔令集』、『續資治通鑑長編』を『長編』、『建炎以來繫年要錄』を『要錄』、沈家本『歷代刑法考』（鄧經元・駢宇騫點校『歷代刑法考 附寄移文存』中華書局、一九八五年十二月による）を『刑法考』と略稱する。引用文中の（ ）内は原註、（ ）内は筆者註を示す。

註

（１）ただし、唐鬪訟律五條註「人に兵刃を以て己に逼られ、因て兵刃を用て拒みて傷殺すれば、鬪法に依る」によれば、兵刃による攻撃への反撃であれば、兵刃を使用しても鬪殺とされて絞が適用される。

（２）宋代の赦降に關しては、『刑法考』二冊六二八—三七、六五九—六六、六七—四、七二—三六、七四—九五〇頁、Brian E. McKnight, *The Quality of Mercy: Amnesties and Traditional Chinese Justice*, The University Press

of Hawaii, 1981, pp. 73-93.; *Law and Order in Sung China*, Cambridge U.P., 1992, pp. 485-91. などを参照。

（３）『刑法考』二冊六二八—三七頁。「德音」には「德音と言わざれども是れ德音たる者」も含む。

（４）疏決は録囚・慮囚とも言われる。宋代では、長期にわたる繫囚を解消するため、皇帝自身の命による簡便な手續により繫囚に一定の減釋を與えるものであったが、首都だけでなく地方にも官僚を派遣して實施され、減降の内容もあらかじめ規定されるようになって、實質的に赦降と同質化した。疏決については、『刑法考』二冊七九—一八〇五頁、島善高「唐代慮囚考」（瀧川博士米壽記念會編『瀧川政次郎博士米壽記念論集 律令制の諸問題』汲古書院、一九八四年五月）などを参照。

（５）すでに唐律は、名例律一八條「諸そ十惡・故殺人・反逆縁坐を犯し、獄成れば、赦に會うと雖も、猶お除名。即し監臨主守、監守する所の内に於て姦・盜・略人を犯し、若くは財を受けて枉法すれば、また除名。獄成りて赦に會えば、免所

居官、賊盜律一五條「諸を蠱毒を造畜し、及び教令すれば、絞。……造畜すれば、赦に會うと雖も、并びに同居の家口及び教令人は、また流三千里」、斷獄律二條「諸を恩赦あるを聞知して故らに犯し、及び惡逆を犯し、若くは部曲・奴婢、主を毆り、及び謀殺し、若くは強姦すれば、皆な赦を以て原すを得ず。即し小功の尊屬・從父・兄弟を殺し、及び謀反・大逆は、身は赦に會うと雖も、猶お流二千里」など、赦の適用が除外され、あるいは全免の得られない犯罪に關する規定を設けていた。宋代では「赦降を以て原減せず」と規定されるこの種の犯罪は増加傾向にあった。これに關する慶元名例赦の一條文について論じたものとして、Werner Eichhorn, "Bemerkungen über einige nicht amnestierbare Verbrechen im Sung-Rechtswesen", *Oriens Extremus*, Jahrgang 8, Heft 2, 1961, SS. 166-176. があつた。

(6) 劫殺は宋代の赦降にしはしあはれぬ文言であるが、その内容は不明確である。この語を「中國近世の法制と社會」研究班「宋史刑法志」譯注稿」上(『東方學報』京都六四冊、一九九二年三月)三八〇頁註(3)は「劫囚殺人か」とするが、狭小にすぎない。上海社會科學院政治法律研究所編『宋史刑法志注釋』正集(群衆出版社、一九七九年七月)八一頁註(14)の「劫盜殺人」、佐伯富「宋代における牢城軍について」(劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集刊行會編『劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集』同朋舍出版、一九八九年九月)二七一頁の「財を取らんとして殺す」のように、強盜殺人に近い概念と考へるべきである。

(7) 唐斷訟律五條疏議「鬪闘する者には、元と殺心なし。相い鬪闘するに因て人を殺せば、絞。刃を以てし、及び故らに人を殺せばとは、謂うところ、鬪うに刃を用いれば、即ち害心あり、及び鬪争に因るに非ず、事なくして殺す、是れ故殺と名づく。各く合に斬罪たるべし」。

(8) 至道元年四月一九日の疏決は、『長編』卷三七、太宗では「十惡、劫殺・故殺・鬪殺、官典の賊を犯し、及び官物を損敗するを除くの外」として鬪殺への適用除外が記されているが、『詔令集』卷二二五、政事六八、恩宥上、遣官決獄減降一等詔では「十惡、劫殺・謀殺・故殺、官典の賊を犯し、及び官物を損敗して徵督を行わるは赦せざるを除くの外」として鬪殺は適用除外とされていない。咸平三年一〇月二三日の疏決も、同書卷二二八、政事七一、平亂、平王均川峽路德音では「十惡、故殺・劫殺して並びに已に人を殺すを爲し、官典の枉法賊を犯すは赦せざるの外」として鬪殺の適用除外が記されていないなど、史料により異なる場合がある。

(9) 鬪殺の全面的適用除外を定めた赦降は、慶曆八年(一〇四八)閏正月甲辰(五日)の王則平曲赦河北制(『詔令集』卷二二八、政事七一、平亂)「河北の諸州軍に曲赦すべし。慶曆八年閏正月五日味爽より以前に見に禁ぜらる人は、貝州の妖賊王則の一行の、應干る徒黨、及び城に在りて守を失し、或は節を屈して賊に順いし官吏等に係り、並びに十惡を犯し、劫殺(劫、もと誤って訪に作る)、鬪殺して並びに已に人を殺す者、放火、符印を偽造し、官典の正入己賊を犯すは赦せざるを除くの外、其餘の雜犯の罪人は、罪の輕重とな

く、咸な之を赦除せよ」、紹聖四年（一一〇九）九月五日の
 慧星見大赦天下制（同書卷一五五、政事八、倣災五）「天下
 に大赦すべし。應そ紹聖（紹、もと誤って詔に作る）四年九
 月五日昧爽以前の罪人は、劫殺・謀殺・故殺・鬪殺を犯して
 並びに已に人を殺すを爲す者、並びに十惡、符印を偽造し、
 放火等の罪は、並びに赦せざるを除くの外、其餘の罪は、
 輕重、已に覺察すると未だ覺察せざると、已に結正すると
 未だ結正せざるとなく、咸な之を赦除せよ」など、少數な
 ら、哲宗朝に至るまで見出すことができる。

(10) 宋代の死刑奏裁については、拙稿「宋代死刑奏裁考」（『東
 洋文化研究所紀要』一二四冊、一九九四年三月）を参照。

(11) ただし、「鬪殺情輕」という表現は、すでに至和三年（一
 〇五六）正月八日の詔（『宋會要』一六九冊、刑法五、省獄）
 「開封府畿内及び輔近郡の繋せる雜犯死罪以下は遞々一等を
 降し、杖已下は之を釋せ。鬪殺の情輕き者は、仍お奏裁を聽
 せ」などに見えている。

(12) 宋代の斷例については、郭東旭「論宋代法律中『例』的發
 展」（鄧廣銘・漆俠主編『中日宋史研討會中方論文選編』河
 北大學出版社、一九九一年五月）、拙稿「宋代斷例考」（『東
 洋文化研究所紀要』一二六冊、一九九五年一月）を参照され
 たい。

(13) 明堂・南郊の大禮の行われる年には、これを豫告する御札
 と、その御札が下されてから大禮赦の發せられるまでの期間
 に發生した一定の犯罪（強盜、殺人など）については大禮赦
 を適用しないとする約束が發せられるのが通例となってい

た。元祐元年では、前者は同年三月癸酉（一六日）の詔（『長
 編』卷三七二、哲宗）「季秋擇日を以て、事を明堂に有さん」
 であるが、後者は確認できなかった。

(14) 熙寧六年（一〇七三）一〇月丁酉（二八日）の「中書に詔
 すらく、今より命官の過犯、及び編配人の犯す所の情理は、
 輕・重・次輕・次重の四等の刑名に分ち、著して定例と爲
 せ、と」（『長編』卷二四七、神宗）や、淳熙一四年（一一八
 七）八月臣僚言所引の政和編配格が編配人の情理を「情重・
 稍重・情輕・稍輕の四等の色目」に、同じ臣僚言が提案した
 編配格も「配法を犯す人」の情理を情重・稍重・稍輕・最輕
 の四等に分けていること（『通考』卷一六八、刑考七、徒流）
 などから考えると、鬪殺情理輕重格も鬪殺の情理を四等に分
 類していた可能性もある。

(15) 相當に簡略化された記事ではあるが、紹興三年（一一三三）
 六月庚寅（七日）の德音（『要錄』卷六六）「川陝の鬪殺の情
 輕き死罪囚を降し、流已下を釋す」、紹興七年（一一三七）
 正月己丑（二七日）の手詔（同書卷一〇八）「諸路の流罪以
 下の囚の一等を降し、内、鬪殺の情輕き者は降配し、杖以下
 を釋す」、同年三月癸酉（二一日）の手詔（同書卷一〇九）
 「建康府の流罪已下の囚及び鬪殺の情輕き者を降し、杖已下
 を釋す」などでも、鬪殺の減等の條件は同じである。

(16) 唐名例律五〇條「諸そ罪を斷じて正條なく、其れ應に罪を
 出すべければ、則ち重きを擧げて以て輕きを明かにす。其れ
 應に罪を入るべければ、則ち輕きを擧げて以て重きを明かに
 す」。

(17) 鬪殺情理輕重格の情理が輕・稍輕・重の三等からなり、理・下手の區分が鬪殺遇恩情理輕重格と同じであつたと假定し、そこにおける情理・理・下手の關係を推定すると、表4のようになる。

表4 鬪殺情理輕重格における情理・理・下手の關係(推定)

	下手輕	下手稍重	下手重
理直	情理輕	情理稍輕	情理重
理曲	情理稍輕	情理重	情理重

(18) 唐鬪訟律一條註「血を見るを傷と爲す。手足に非ざる者、其餘は皆な他物と爲す。卽し兵、刃を用いざれば、また是たり」によれば、傷つけるとは出血せしめることであり、加害手段が兵刃であつても刃以外の部分を使用した場合には他物とされる。したがつて、鬪殺遇恩情理輕重格の下手重に

「斧鑕の類を以て、刀刃を用いざると雖も、上項の要害の處を毆撃し」とあるのは、本來は他物であるものを刃とみなすための規定である。

(19) 唐捕亡律二條「諸を罪人を捕えて、罪人仗を持して拒捍す。其れ捕者之を格殺し、及び走逐して殺し、若くは迫窘して自殺せしめれば、皆な論ぜず。卽し空手にて拒捍するに殺せば、徒二年。已に拘執に就き、及び拒捍せざるに殺し、或は之を折傷すれば、各々鬪殺傷を以て論ず。刃を用いれば、故殺傷の法に従う」の第三項に該當する場合も、理直とされた可能性がある。

(20) 清代の防衛行爲については、中村正人「清代刑法における正當防衛」(『法學論叢』一二七卷一、三號、一九九〇年四、六月)を参照。

〔附記〕 本稿の作成にあたり、金澤大學法學部助教授・中村正人氏のご教示を得た。厚く謝意を表する。

**A STUDY OF THE REGULATIONS PROVIDED IN
AMNESTIES THAT DETERMINED THE RELATIVE
GRAVITY OF CIRCUMSTANCES SURROUNDING
A CHARGE OF BODILY INJURY THAT RESULTED
IN DEATH (DOUSHA YU'EN QINGLI QINGZHONG-
GE 鬪殺遇恩情理輕重格)**

KAWAMURA Yasushi

During the Song dynasty, amnesties were granted with remarkable frequency. Early in the dynasty, these amnesties had applied to incidents of bodily injury resulting in death (dousha 鬪殺), however, this category of crime was gradually excluded from the scope of amnesties. In the mid period of the reign of Zhenzong 眞宗, amnesties applied in cases “extenuating circumstances” (qingli kemin 情理可憫). In such a case, a death sentence could be reviewed by the emperor and reduced to a sentence of exile. In the period of Shenzong’s 神宗 reign, the conditions for the review and reduction of sentence were changed to “circumstances of light gravity” (qingli qing 情理輕). A decision made on the basis of “extenuating circumstances” was subjective in nature, whereas one made on the basis of “circumstances of light gravity” was relatively objective. In the period during and after the reign of Zhezong 哲宗, it became the standard practice that a death sentence pronounced on a criminal to whom this condition pertained was reduced without review. Accordingly, it became necessary for prefectural officials to be able to determine to what patterns of behavior this condition was applicable. Under these circumstances, regulation for this was established and recorded in the *Qingyuan Tiaofashilei* 慶元條法事類. As a consequence, this work presents a far more detailed explanation of this crime than do similar provisions contained in the Tang Code 唐律. The account contained in the *Qingyuan Tiaofashilei* provides for the determination of the relative gravity of circumstances in two degrees: light and heavy, and combines three degrees of injury (xiashou 下手) with two degrees of reason (li 理). The three degrees of injury

comprise the means used to inflict injury, the position of the wound, and the state of the wound. These specifications are thus rather objective. However, the specification of two degrees of injury classified cases according to a category of “straight” (直) or “crooked” (曲). As such, this specification was subjective in nature, as it called for decisions to be rendered based on consideration of “extenuating circumstances”. Because of this element of subjectivity inherent in such a specification, the scope and application of this condition tended to be expanded in consideration of the personal advantage of officials.

GUJARĀT AND THE PORTUGUESE IN THE FIRST HALF OF THE SIXTEENTH CENTURY A. D. —Relations Concerning the Port City of Dīw—

MASHITA Hiroyuki

Following the conflict in 1508 between the allied forces of the port city of Dīw in Gujarāt and the Mamlūk dynasty, on the one hand, and forces of the Portuguese fleet off Chawl, on the other, a Portuguese fort was established at Dīw in 1536. My purpose in this paper is first, to confirm and describe the train of events leading to the extension of the Portuguese in Gujarāt, with particular emphasis on a political, rather than economic or cultural interpretation. Second, through a description of these events, I hope to clarify the structure and nature of the relations that pertained between Gujarāt and the Portuguese. In this paper, I will focus in particular on the period from 1520—1536.

My conclusions from a discussion of these events are as follows. Relations between either Dīw or the Aḥmad-Shāhī dynasty and the Portuguese had been characterized by conflict involving military force since 1520. Particularly after his occupation of Dīw (1526), Aḥmad-Shāhī Sulṭān Bahādur assumed a position of distinct rivalry against the Portuguese. The events of this era were interpreted as a game played on both